



# 避難情報がなぜ「適切な避難行動」 に結びつかないのか

兵庫県立大学 室崎 益輝

## はじめに

西日本豪雨災害など最近の災害を見ていると、逃げ遅れて犠牲になる人が後を絶たない。災害の破壊力が強大になっていることもあるが、避難勧告や指示あるいは避難に関わる警報が被災者に正しく伝わらないことが、逃げ遅れを生んでいる。「伝える」と「伝わる」とは違い、伝えても理解されなければ伝わったことにならない。そこで本稿では、この逃げ遅れを防ぐためにどうすればいいのか、正しく伝わるためにどうすればいいのかを、改めて検討することにしたい。

## フローの情報とストックの情報

人間の行動は、その人が認知する「情報」とその人が置かれている「環境」に左右される。情報は「行動を促すための刺激や記憶などの情報」、環境は「行動が行われる空間や時間などの環境」をいう。このうちの情報は、さらにフローの情報とストックの情報にわけられる。フローの情報は、視覚や聴覚といった五感を通じて受容されるリアルタイムの情報をいう。防災無線やラジオその他の情報媒体から提供される情報のほか、自らが降雨や水位の状況などを見て獲得される情報が、それに該当する。ストックの情報は過去の学習や経験などにより学習され、大脳に蓄積されている記憶

や経験知をいう。このストックの情報は、人々の防災意識や防災知識を規定している。危機感が人によって異なるのは、このストック情報の個人差による。

ところで、フローの情報が適切に与えられたとしても、それを理解し判断するためのストックの情報が不適切であると、安全な場所に迅速に移動するという行動につながらない。同じ警報を聞いても、避難する人と避難しない人に分かれるのは、一緒に逃げようと声をかけてくれる人がいるかどうかという環境の違いにもよるが、それ以上に警報を理解するために必要な意識や認識を持っているかどうかというストック情報の違いによる。フローの情報は主として「送り手」の問題、ストックの情報は主として「受け手」の問題である。送り手が、多様な手段を使って精緻に情報を発信したとしても、それを正しく理解する力が受け手になれば、情報は正しく理解されず、正しい行動につながらない。

過去の貴重な災害体験が正しく伝わっていない、警報や勧告などの意味が正しく理解されていない、気象変動を含む自然環境の認識が正しくされていない、そして何よりも身の回りのリスクを我がこととして捉えられていない。こうした経験不足や学習不足が、ストック情報の不足につながっている。このストック情報の不足の問題の改善をはかることなくして、逃げ遅れを防ぐことはできない。

避難情報の問題は、送り手の問題以上に、受け手の問題として受け止める必要がある。

## 防災意識の啓発と教育のあり方

避難施設の整備はハードウェア、情報システムの確立はソフトウェア、防災意識の醸成はヒューマンウェアである。ハードウェアやソフトウェアだけでは避難の安全性は確保しきれず、そこにヒューマンウェアというストック情報の充実が必要になる。このストック情報の充実をはかるうえでは、防災意識や知識の啓発をはかる教育の強化が欠かせない。さて、この教育の充実強化で問われるのは、正しいストック情報の蓄積や正しい意識の形成をはかるために、いかに教育や啓発をなすべきかである。防災教育のあり方とその効果の関係が、必ずしも明確になっていないために、防災教育がハウツーものの知識の詰め込みになったり、精神主義的な訓練の繰り返しになったり、複雑で難解な情報の切り売りになってしまっている。ストックの情報が力にならなければならない。危険を察知する力、状況を判断する力、事前に準備する力を、いかに醸成するかが防災教育に問われている。

ところで、気象警報や避難情報が精密になればなるほど「避難しない人」が増えている傾向に留意する必要がある。安全や避難に関わる重要な原則の一つに「フルプルーフ」というのがある。危急時には、パニックになるという人間の判断力が著しく低下する。ストック情報や記憶情報を引き出す力も低下する。危急時には、難しいことは思い出せないし実行できない。例えば暗証番号で扉を開錠する方式は、暗証番号を思い出せないので有効に機能しない。危急時には小学生並みの判断力になるともいわれ、小学生でも理解できるように、明解で簡便な情報提供が求められるのだ。インターネットで情報を検索することは、暗証番号を思い出させることに通じる。自己責任を追及

し、個々人に多くを望んではならない。

この防災教育で留意しておくべき問題点が、もう一つある。「ぐらっと来たら机の下」式のハウツーものの「知識詰め込み教育」の問題点である。阪神・淡路大震災では、机の下にもぐって死んだ人が沢山いる。耐震補強がされていない住宅で、脚の細いひ弱い食卓にもぐったからである。機械的に机の下と教えるのではなく、安全な場所に身を置けと教え、安全な場所は何処かを考えさせるようにしなければならない。これに関して、「逃げ遅れた場合は2階に」という知識の詰め込みも、逃げ遅れを生む原因となっている。潜在的に避難場所に行きたくないと思っているので、「2階でいい」のなら自宅にしようと安易に思っている人が多い。逃げる場所はケースバイケースで、机の下でも2階でも危険な場合があることを教えなければならない。

## 個人避難からコミュニティ避難へ

九州北部豪雨や西日本豪雨での避難の成功例を見ると、自治会長が各住戸に声かけをして避難を促した例、消防団員が車で迎えに行き一緒に避難したという例が、少なくない。大丈夫と思って自宅にとどまっていた人が、コミュニティの呼びかけで避難を決断し、難を免れている。私は、避難の3原則と言って、「早めの避難」「確かめて避難」とともに「みんなで避難」を推奨している。早めの避難は、勧告が出たらすぐに、勧告が出なくても危険だと思ったら「空振り」覚悟で避難することをいう。「確かめて避難」は、事前に安全な避難経路と避難場所を確かめておいて、本番に備えることをいう。その二つの原則に加えて、みんなで助け合って避難する、みんなで一緒に避難するという「みんなで避難」が必要になる。コミュニティぐるみの避難行動が、逃げ遅れを無くすうえで大きな力になるのだ。この意味で、「てんでんこ避難」よりも「みんなで避難」を、コミュニティ

ルールとして定着させなければならない、と考  
えている。

最近の避難情報の動きを見ていると、テレビやラジオまたインターネットやSNSなどで、直接個人に情報を提供することが主流になっている。しかし、先に述べたように個人に限界があるとすると、自己責任型あるいは自助型の避難を前提とした、個々人に対する情報提供ではうまくゆかない。ホットラインで自治会長や消防団長あるいは学校長などに情報を伝え、その情報を受け取った人が構成員に口伝えするという、リーダー率先型あるいは互助型の避難を前提とした、コミュニティを媒介とした情報システムに切り替える必要がある。

さらに、コミュニティ避難を基本にするならば、コミュニティごとに危険が判断できる仕組みをつくらなければならない。フローの情報として、マスケールの情報だけでなくミク罗斯ケールの情報、ハイテクの情報だけでなくローテクの情報がある。ローカルな降雨情報や河川の水位情報を監視カメラなど獲得し、地域の情報をセンサーなどでコミュニティ自らが情報を取りに行くようにしなければならない。また、ストックの情報としてハザードマップを作ること、過去の災害履歴を伝えることが欠かせない。

## 避難したくなる環境の整備を

避難への見切りは、危険な場所からの「退避力」と安全な場所の「吸引力」の力関係で決まる。その場を離れようとするには、危機を感じて退避しようとする力が必要だが、同時に避難先に魅力があっしていきたいと思わせる吸引力が必要である。被災者が、避難を逡巡する大きな原因に「避難先が遠く、暗くて汚く、避難生活が惨めで、避難したくない」というのがある。避難先の吸引力を高

めるためには、こうした原因を取り除く努力がいる。

避難先でご馳走が食べられる、プライバシーも確保されている、ゆっくり勉強もできる、みんなで団らんも出来るということであれば、もっと多くの人が避難するものと思われる。日本の避難場所や避難所は、海外の難民キャンプに比べはるかに劣悪と言われている。何も持たずに急いで避難する場、傷ついた人が生活する場であるので、病院並みかホテル並みと言わないまでも、気持ちよく過ごせる場にしておく必要がある。フルコースの料理が食べられるということであれば、みんな避難するであろう。

避難しない人を責める前に、避難したくなる環境の整備に心がけたい。その環境改善では、避難先の環境だけでなく避難途中の環境の改善も必要となる。経路に非常灯を設置すること、避難標識を設置すること、手すりを設置することにも心がけたい。そして何よりも、高齢者や障がい者が苦勞することなく避難できるように、送り迎えの自動車を用意することが望まれる。「高齢者等避難準備情報」が発令された時には、避難所の鍵を開けるだけではなく、お迎えの自動車を差し向ける心遣いがある。

その避難経路の安全性では、遠くまで避難しなければならないという問題の改善も不可欠である。遠くの学校まで避難しなくとも、コミュニティの中かその近傍で、避難できる安全な場所があれば、所有者の了解のもとに緊急の避難場所として指定しておき、とりあえずの避難場所にすることを進めたい。地区防災計画などで「コミュニティ避難場所」として定め、とりあえずは近くて安全な場所に逃げ込むようにしたい。いずれにしろ、避難率の向上をはかるうえで、「遠い避難場所」「汚い避難場所」の改善は急務である。